

高等部一年A組

新聞記事「外国人と共生『簡単じゃない』」

参政党票が上回った『優等生』の本音」を読んで

青木 修悟

これを読んで、「やっぱ日本って劣化してんじゃね？」と思いました。今の日本は他の文化を取り入れなさすぎて、もはや外国人の方々がこちらに合わせるという行動に出ているというように僕は読み取りました。僕は読むのが得意ではないのですが、これを読んで、「日本人は気が利く」と外国の方々は思っているかもしれませんが、実際に日本に来てみたら日本のルールに合わせなければいけないというようになっていくと思います。

しかし、今の僕には一切関係ないかなと思います。税金という存在はもちろん知っています。政府というものも知っています。でも、僕はこの国の一人の人間にすぎないので、別に国に大きな影響を与えることはないと思います。それと僕は投票を一回もしたことがないので、別に知ってても意味のない知識だと思っています。

確かに人の声でリーダーを決めるのは大切かもしれませんが、さすが今の社会はシンプルに終わってると思います。人々の意見、若者の意見、僕の意見、他の人の意見というものはバラバラかもしれませんが、たった一人の人間でもそれを変えてしまうことができます。日本語がうまくなくていいのはわかっています。例えば、僕と友達五人が同じ自民党を進めたいと思うとしましょう、ですが仲のいい六人目がいきなり出てきて、民主党に誘ってきたら全員が一気に民主党になりうる可能性があります。それがもつと大きな規模になったらどうでしょう、明らかに自民党が不利になってしまいます。これが今の世の中だと思います。仲のいい友達に誘われたからこっちに行く、あの人が嫌いだから反対側に行く、というのが当たり前のようになります。

この新聞にも、「東南アジアの国々の人がなにか悪いことを企んでんじゃないか」みたいなことが書いてあります。でも彼らは一方で、「入れ替わりでいいから何人も仕事につかせてどんどん投資しようぜ」みたいなことが書いてあります。僕は実際に話したことはないのですが、彼らは誰かに誘われたからその仕事をやっているだけであって、日本の経済を自分が思うようにしたいから働いているというようなことは何も考えてないように読んでいました。

これはよくあることです。人というものは少しでも楽をしたい生き物です。それは、日本人がよくやることだと僕は思います。視野を極限まで広げて、誰かに合わせようとはします。別にそれは悪いことじゃないかもしれませんが、外国人に対しては厳しくして、見ていると馬鹿のように見えてきます。まあでも僕もそういうところはありますが。人の顔を見て「気を遣っている」ように見えるだけで、実際は考えたくないから楽をしているだけ。でも僕はそんなときはちゃんと責任を持つと思うています。何事も責任を持つてやるのが大事だと思います。

ただし全員がそうでもないという事はわかっています。他の人の意見につられ、最終的には相手が何かを始めないと自分の意見は出てこない。出てきているのは反論だけ、ということとはよくあります。それは日本人らしいなと思いますけどね。

〈新聞記事…デジタル版 朝日新聞 2025年7月27日〉

子供の立場から少子化対策への提案

内田 乙都葉

みなさんこんにちは。突然ですが皆さんは少子化と聞いてどのような事を思い浮かべますか？多くの人は日本を思い浮かべるでしょう。しかし、少子化対策と言われるとすぐに思いつく人は少ないのではないのでしょうか。本日は、子供の立場から少子化対策への提案について話していきたいと思っています。

子供を産む数が減っている要因は様々ですが、資料を見ると子育てと仕事を両立できない、やお金がかかりすぎるなどの子育てのハードルの高さが多くの人の負担になっていました。そこで私は、保育施設を増やしたり、二人目以降の養育費を減額したりし多くの人が感じる壁をなくすことが最優先だとおもいます。

具体的な案としては、〇歳からでも預けられる保育施設をオフィスビルなどの働く人が多いビルで開くこと、そして子供が多い家庭には国から援助金を出すようにすることです。しかし現状では保育士の給料が低く働き手が少なくなっており、私が出したような案は成り立ちません。

そこで二つ目の対策を提案します。現在保育士の給料は上がっている傾向がありますが、まだまだ賃金が低い状態です。ですから、保育士の給料を増やし保育士に負担がかからない制度にするべきだと思います。また、負担をかけないという意味で、子育てを既に終えた人を雇うというのも一つの手段だと思います。そのような人たちは子供の扱いも慣れていて小さい子に会うこと自体が癒しとなるので、パートタイムだけならやろうと思う人もいると思います。

今日お話しした対策は大きく分けて二つです。子育てのハードルを下げることで、そのために保育士の負担を減らすことです。これらを実践することで少子化を防ぐことができるとおもいます。ご清聴ありがとうございます。

夫婦別姓について賛成か反対か

垂石 純奈

私は、夫婦別姓について賛成か反対かについてスピーチします。

私は夫婦別姓には反対です。なぜなら夫婦が同じ姓を使うことは、一つの家族としての象徴であると思うし、夫婦別姓だと混乱を生む可能性があります。また人生の新しいステップが始まったという実感も得られないと思うからです。

一つ目は夫婦が同じ姓になったら一つの家族としての象徴となるから

です。彼氏と彼女の時は、世間はふたりをそれぞれ別の人間として見ています。しかし、結婚をすると、世間はふたりを一つの家族として見るようになります。夫の姓を名乗ることで、夫と家族になって、家族を築くという気持ちが生まれると思います。結婚した夫婦は、同じ姓を使うことで一緒に生活をして同じ時間を過ごすという気持ちを誓います。二〇一七年に発表された「A Journal of Onomastics」という研究では、結婚して姓を変える女性の多くは、家族のきずなを作ろうとする人が多いです。二つ目は、夫婦で違う姓を持つことは、混乱を生む可能性があります。例えば、子供の先生、医者、空港職員などが、あなたが親ではないと予想して、親であることを証明するために別の証明を出さなければいけない場合があり、これはとても面倒です。また、税金、保険、不動産の所有権といった法的手続きも複雑になり、家族関係の追加書類を出さないとけない可能性があります。

そして最後に、結婚して夫の姓を名乗ったら人生の新しいステップが始まるような気持ちになるでしょう。それは、二つの人生が一緒になり、新しい何かを築き始めるということを意味すると思います。例えば、本の新しいチャプターでスタートのページをめくると先に進むのと同じで、結婚して姓を変えることは、自分の人生の一つのステージが終わって、夫とその子供たちと一緒に新しい家庭を築き始めるんだという大切なことだと思います。

これらの理由から私は夫婦別姓には反対です。

収入が高い方

中込 風香

私が選んだ「収入が低いが好き仕事か、収入が高いが好きではない仕事か」というお題に対して、皆さんはどちらを選ぶでしょうか。私はこのお題を見た時に、迷わず収入が高い方しかなく、と思いました。理由を簡単に述べてしまえば、結局はお金、というふうになってしまうかもしれません。でも、やはりお金は大きな理由になってしまいます。

私の一番大きな理由は、お金があれば、お金を好きなことやものにたくさん費やせるからです。好きじやないことが仕事だったとしても、その分お金が入ってくるならば、休みの日には好きなことを十分楽しむことができます。また、好きじやない仕事をやった分、休みの日の贅沢感がより増すので、感じられ、それがまた良いのではないかと私は考えます。

ですが、ここまでのスピーチを聞くと、好きなことやものにお金を費やすために働くのならば、好きなことを仕事にすれば問題ないという意見もあるのではないのでしょうか。もちろん好きなことを仕事にしたなら、毎日自分のやりたいことができます。しかしその一方で、それを仕事にしたならば、その特定の「好きなこと」を続けることになっていきます。

私の場合、好きなことがずっと一緒なわけではないので、仕事として好きな事を続けていてもいずれ変わってしまうのではないかと、という心配があります。また、好きなことが仕事であっても、その仕事の中には人間関係や、やりたくないタスクもでてくると思います。そういう点で見てみると、収入が低い好きな事を、わざわざ仕事にする必要がないという考えもわかるのではないのでしょうか。

このような理由で私は「収入が高いが好きではない仕事」を選びます。好きなことを仕事にしなくても、仕事で得た収入で仕事とは別に、自分の沢山の「好きな事」を楽しみたいです。

外国人とは国籍で決まるのか？

福田 六花

外国人とはなにか？グーグルは「外国人というのは国の国籍をもっていない人だ」と言っていた。だが、私にとって外国人というのはそれだけではなく、その国の文化や言葉を知らない人のことだ。そういう意味では私は日本に行く外国人だ。確かに私は日本語を知っているし、伝統的な文化もそこそこ知っている。何よりも日本の国籍を持っている。だが、「最近のスラングやファッションは何？」と聞かれても私はわからない。

日本に私が行くと、自分が外国人だとよく感じる。二年前ぐらいに私の家族がやっと日本に到着して、日本の国籍で入ろうとした時に、おじさんが「外国人はあちらで」と言ってきた。私たちは、「いや、日本のパスポートを持っています」と三回ぐらい言わないと相手は納得してくれなかった。私が外国人だなと感じたのはこれ一回だけではない。他には電車に乗ったり道を歩いていると、他人と比べてマナーが全く違ったり、服装も違った。そこで私は思った、日本語をそこそこ喋れる私でさえも外国人の感じがするのに、全く日本の文化や日本語を知らない人はどういう気持ちなのか、と。

日本は今、外国人が昔と比べて増えてきているし、観光客もとても多い。そのおかげで、「日本人ファースト」という考えが増えている。私はこの考え方を支持していない。なぜなら、日本の出生率は世界でもランクが低いからだ。ここで移民を止めるのは、悪い考えだと私は思う。だからと言って、日本人がなぜ不満になってきているのか解らないという意味ではない。日本人は自分の文化や社会のルールにとってもプライドがあり、それを破る人が気に入らない。

「じゃ、何をすればいいんだ？」私だったら、外国人のために日本に馴染みやすいようにクラスをオフアーしたら良いと思う。私の母と父が初めて二十年前にアメリカにきた時に、外国人のための英語のクラスをとっていた。そのおかげで、英語がとてつもないというわけではないが、そこそ喋れる。だから、私は外国人のために日本語を教えるだけのクラスだけではなく、日本の社会的なルールも教えた方が良いと思う。特に「ゲストワーカー」(違う国から仕事の仕事や農業の仕事をしにくる人)のために、ただでこういうクラスを受けられるようにすれば良いと思う。

日本の文化や社会的ルールを教えることで市民権を得やすくなる。なぜなら、そのクラスのおかげで前は知らなかったルールを知ることができるし、自分だけでは身に付けられなかった日本語を習うことができる。そして、外国人がどんどん市民権を得ることで、労働者階級が増え、エコノミーをブーストできる。

外国人とは国籍を持っていることだけではなく、その国の文化や言葉を知らないことだ。確かに、外国人にとって日本の社会的ルールは守りにくい。いや、知らない、守っているのかいのかさえわからないの

だ。だからこそ、移民を全てリミットするのではなく、逆に日本のコミュニティーに入りやすいように、クラスをオファーするべきだ。できれば日本人も、外国人の視点を理解してお互いを受け入れれば、外国人は完全に日本で暮らしやすくなり、日本人は労働力などの問題を解決できたり、どちらにも利益が得られる。そうなれば、そこに不満は無くなるのではないだろうか。

ここまでで、共生のためのアイデアはだせた。では、最後に、ここで私はあなたに問う。あなたにとって、外国人とはなんだ？

全体と自分のあいだ

福中 絢詠

ハイスクールのマーチングバンドの活動をしている私は、そこから学んだことがある。それは、「自分の役割を理解し、全体を見て動くこと」の大切さだ。私が担当しているユーフォoniumという楽器は、中低音で音がやわらかく、他の楽器を支える役割をもっていることが魅力的である。

マーチングバンドでは、一人ひとりの努力だけでなく、全体の動きやバランスがととも重要だ。自分の音が強すぎると全体のハーモニーが崩れ、弱すぎると存在感がなくなる。しかし、活動を始めたばかりの頃は、マーチングをしながら演奏をし、振り付けや構成をも同時にこなすことの難しさを感じ、思うようにできずに苦しい時期があった。その中で私は、「自分の役割を理解し、全体を見ながら動くこと」の重要さを実感した。演奏の技術だけでなく、仲間と協力して一つの音楽を作り上げることができた時、協調性や責任感をも身につけることができた。

この経験を通して学んだことは、これらは音楽に限らずさまざまな場面に通じるということだ。例えば、授業でのグループ発表でも、自分の担当部分だけを完璧に仕上げても、他の人とのつながりがなければ良い発表にはならない。つまり、相手の意見を聞きながら、自分の内容を整理し、全体の流れを意識して行動することが大切だと気づいた。

マーチングバンドで学んだこの姿勢は、これからの人生でも必ず活きていくと思う。将来どのような仕事や活動をするにしても、目の前のことだけに集中するのではなく、周りとの関わりを考えて行動できる人でありたい。ユーフォoniumを通して得た「全体を見て動く力」は、私の中でこれからも大切にしていきたい考えである。

根拠なき自信

松永 陽向

自信には根拠が必要であると、私たちは当然のように考えている。努力の蓄積や結果、他者からの評価が伴って初めて、自信は正当性を持つという。しかし、私は根拠のない自信は、根拠がないが故に、行動に駆り立てる強さを持つと思う。よって、私は根拠のない自信は無意味なものでも、否定されるべきものでもないと考ええる。

確かに、根拠のない自信は不合理だ。自らの能力を過信することで現実の認識を歪め、誤った判断に至る可能性がある。それに周囲の人を巻き込んでしまえば、人との関係性に亀裂を生むことも否定できない。その意味で、根拠のない自信は軽率かつ無責任だと評価されるのも致し方ないだろう。

しかしながら、根拠のない自信を否定することはできない。私は根拠のない自信は、「自分は何も知らない」ということを知ることから生まれると考える。未知に挑むためには、確実な根拠は存在せず、それでも行動するための勇気が必要だ。そんな時、根拠のない自信は、未知に踏み出すために必要な、不確実性を克服するための原動力となってくれる。

私自身も、根拠のない自信に救われたことが何度もある。その中でも一番印象に残っているのはクエストカップでの出来事だ。クエストカップとは企業から課題を与えられ、一年間かけて行った探求学習の成果を発表する全国大会だ。日清製粉グループを担当していた際、アイデア出しで行き詰まっていた中、根拠はないものの昆虫を粉末化して食料に活

用する提案をしたところ、企業受けがよく優秀賞を獲得できた。このように、自信とは必ずしも結果に依存して生じるものではない。むしろ、自信が先行したからこそ得られる結果もある。

根拠のない自信は危うさを伴いつつも、未知への挑戦を可能にする力だ。無知を自覚し、行動に移す勇氣によって、根拠のない自信は単なる過信ではなく、人間の成長に不可欠な要素となると私は考える。

車への条件

宮崎 緋粹

私が最近欲しいと思っているものは自分の車です。私は最近パーミットを取りました。十六歳になるまで免許は取れないので、九月の誕生日まで待たないといけません。しかし車のことはもう考えています。

私は学校の近くに住んでいるのでバスは来ません。私の母が毎日運転してくれます。でも、来年からは悪いなと思います。そこで私専用の車があるといいと思います。私が学校、習い事、その他のお出かけの運転を自分で出来れば、親に運転の負担をかけなくて良くなります。

私の友達はどうも免許をとり、車を持つ人も増えてきています。それで、来年からは一緒に運転して学校に行こうという話にもなります。しかし私は来年から最初の一時間目の授業を取りません。そのため、一緒に学校に行ける人を見つけるのは難しくなります。

もしできたなら、BMWかAUDIのオープンカーが欲しいです。でも最初から高い車に乗って傷をつけると嫌なので、安い車もインターネットで調べています。そうになったら私はお母さんの車を使い、お母さんが新しい車を使うのはとてもいいアイデアだと思います！あはは。

このように私が車に必要な条件は揃っているのですが、親からの許可という一番厳しい条件がまだクリアされていません。

電車やバスの広告はもういらない？

山本 康稀

僕がこの世に不要だと思うものは、電車やバスの中にある広告です。

僕がこう思う理由は、今ほとんどの人が電車やバスの中でスマートフォンを見ていて、広告を見る人がとても少ないからです。しかも、もし広告を見たとしても、一日の最後には忘れていくことがほとんどです。さらに自分には全然関係のない広告や内容が難しい広告などたくさんさんの広告があり、ごちゃごちゃして誰にも見てももらえてないんじゃないかと思えます。

このような広告がある理由は、鉄道会社やバス会社の収益になるからです。企業側が広告を出すことで企業がお金を出し、そのお金が電車やバスの運行費になっているわけです。

たしかに、広告は電車やバスを運営するための役に立っているのかもしれないですが、今はSNSやインターネットでの広告の方がもっと効果的な宣伝ができるので、ほんとうに知ってもらいたい商品、サービスがあるのなら、電車やバスの広告は辞退したほうが良いと考えます。

広告は、交通機関にとって大事な収入源であることは、間違いありませんが、広告を出している企業は、宣伝の仕方を考え直した方がよいと考えます。

高等部二年A組

北山 玲那

やりたいことを続けてキャリアを育てたい

作業療法士

有田 真央子

私がつきたい職業は作業療法士(OT)だ。この職業は医療系でリハビリテーション科の一つで、主に生活面でのリハビリに特化している職業だ。リハビリテーションには他にST(言語・聴覚のサポートをする職業)とPT(フィジカルのトレーニング、走るなどの動作をリハビリする職業)がある。

私がOTになりたい理由は人の世話をすることが好きだからだ。人の世話をする仕事は他にもあるが、私がOTに惹かれた理由が、OTはその人らしい生活を取り戻し、生きる楽しさをまた実感させることが仕事だからだ。高齢になったり、怪我などでできていたことができなくなってしまう人、元々障害がある人など、生きる目的をなくしてしまった人をまた輝かせられる、それがOTだと思う。

OTになるには二つ方法がある。専門学校に行くか大学に行くかだ。どちらも三から四年かかり、最終的には国家試験に合格しなければいけない。合格後は病院に就職する人が多いが、ある個人の家に勤める専属OTになることを選ぶものもある。

私が実際にこの職業に就いたら、一人の患者に力をいれるのではなく、病院でたくさんの方々の障害を持つ方々と向き合い、柔軟性、そして個々にあったリハビリを提供できるように努力をし続けたい。この経験から人々の役に立ち、尊敬してもらえる人になれると思う。

収入は少ないが自分が好きな仕事をするか、それとも収入は高いが自分がやりたくない仕事をするか、どちらかを選ぶとしたら、私は自分が好きな仕事をします。無理に我慢して高収入の仕事を選ぶより、自分がやりたいことを続けてキャリアを育てたいと思うからです。その方が学ぶ意欲も自然に湧き、成長につながると思っています。好きなことや得意なことに取り組めば、努力も楽しみに変わり、その分スキルが着実に磨かれます。逆に、合わない仕事は続けるのが難しく、辞めてしまう可能性が高いです。そうなるかとキャリアが途切れて積み重ねがなくなってしまう。自分に合った仕事なら、無理なく長く続けられるため、経験が積み上がり、大きな強みや将来のチャンスにつながります。

また、自分に合った仕事は心身への負担が少なく、健康を守れます。たとえ収入が高くても、ストレスで体を壊したら意味がありません。気持ちに余裕があれば家族や友人との時間を大切にでき、趣味や学びの時間も確保できます。生活全体のバランスが整うことで、安心して豊かな毎日を過ごすことができます。さらに前向きな気持ちで働けることは、自分自身だけでなく周りの人にも良い影響を与え、より幸せな生き方につながると思います。

収入が少なすぎて生活に支障があったらどうするかについても、どうやりくりするか、解決策を考える必要があります。例えば、無駄な出費を減らしたり、副業などで少しずつ収入源を広げたりすることができます。短期的には節約や工夫が必要ですが、自分に合った仕事で経験を積み重ねれば、長期的には安定につながるはずです。

そして、自分に合った仕事を通じて磨いたスキルや経験は、将来別の分野や新しい挑戦にも必ず役立ちます。短期的な収入よりも、自分らしく積み上げたキャリアの方が長期的には大きな価値を持ちます。やりたいことを続けて得られる喜びは、お金では買えない財産になると思っています。さらに、自分らしく働く姿勢は周りに良い刺激を与え、社会全体にと

ってもプラスになるはずです。

【創作文】赤装束の白ひげ妖精

工藤 陽葉

君は赤装束の白ひげ妖精を知っているか？

赤装束の白ひげ妖精とは、その名の通り、赤色の衣装に身を包み、白い髭を蓄えた老人の妖精のことだ。彼は毎年聖誕祭と呼ばれる日の夜中に街に現れ、煙突から民家に侵入し煌びやかな包装で包まれたガラクタを不法投棄し、子供達が用意しておいたクッキーを奪っていくと言う……

「ちよ、ちよつと待ってくださいよ」

「うん？ 何かおかしいことを言ったかな」

青年はやけに興奮した様子で、私を見下ろしてきた。青年は赤装束の白ひげを『サンタクロース』という名前で呼び、ガラクタはプレゼントといい子供達の玩具なのだと聞いた。

「現役妖精なんですから、妖精の伝説くらい知ってるもんじゃありませんか？」

「我々は外に出ないからのう。外の妖精は知らなんだ」

「はあ……」

青年は呆れ顔を浮かべた。真実を話ただけだというのに、何という態度か！

我々は世間一般に言われるところの、妖精と呼ばれる生き物である。

我々は人間よりも小さく、森の奥や洞窟に生息している……などと言うと、動物のように感じるかもしれないが。我々は獣を狩り、その皮をかぶって擬態し生活している。森の外まで出ると擬態も役に立たないので、外を出歩かないということなのだ。

つまるところ、我々は噂話に弱い。外界との交流が弱いので流行にも疎い。人間や他種族との接触の記録もなく、他文化にも造詣が浅いとい

う欠点を抱えている。

他種族ばかりが集まる旅団に入り込み共に歩む道を決めた方がいいが、これではいけないと情報を集めてみた。それも、少しばかり内容が違っていたようだが。

男は肩を落とす私を見かねてか、困り眉をそのままにいろいろと教えてくれた。

「ふむふむ。クッキーを用意するのはサンタクロースとやりに感謝を込めて、とな」

「はい。手作りしたものを置きたい、と騒ぐ子もいて大変なんですよ」
青年は大人の顔を貼り付け、背伸びした声色で子供を咎めた。我々の種であれば、彼と同年の者はまだ家に置いておかなくてはならない、か弱い『幼子』であるというのに。

青年は私の半分も生きていないというのに、人間の世界ではもう大人の仲間入りを果たしている。その上、他の種の中には人間よりも短命で、五つにもなれば一人前という者もいる。これは私が外界に足を伸ばし知った新たな知見の一つである。実際、我々の旅団には八つと六つのお嬢さん方がいる。かくも不思議なことよ。

青年は私の思考を読んだのか、あの子達にも何か用意しなくてはいいかもしれませんね、とつぶやいた。無論、あの子達とは八つと六つの子である。

そうだ、と意地悪な笑顔を浮かべた青年がくすりと笑って振り返った。

「悪い子には石炭をプレゼントされるよう」

「ふむ！ 石炭とはこれまたセンスがあるのう！」

「いやあの、石炭もらつて喜ぶ子供なんていませんって」

何を言うか！ 私は講義の声を上げた。

我々にとつても、もちろん人間や他の種にとつても、石炭は生活に欠かせないものだ。火は我々を助け守るものである。

使い方を誤れば牙を剥くが、きちんと躰れば良いだけの事。猟犬を繰るにも火を繰るにも、飼い主の力量が試されるわけである。

おっと、忘れるところだった。

私は咳払いを一つ、苦笑いを浮かべる青年にそつと赤色のケープを差し出した。私が昨晚徹夜で編んだものだ。染色は今年で四十二になると

いう機織りのマダムに手伝ってもらった。素晴らしい彩色！なんと美しいことか。彼女からおまけにとわけて貰った緑色のボタンがよく映える。白いファーが裾にあしらわれたそのケープは、寸法通り、その青年の肩にピッタリハマる。

うむ、我ながら良い出来だ！

苦笑いの中に困惑と戸惑いを追加した青年の顔は、さながらフレンチのコーヒーにわざわざ砂糖とミルクをたっぷり混ぜて何がしたいのかさっぱりわからないような……おっと。これでは余計に何が何だかわからないな。そんなことを考えているうちに、青年の顔は砂糖とミルクだけを残して疑問符を浮かべた。

私も、背に隠していた同じ色のケープを取り出し身につける。これで準備は万端。

「赤装束の白ひげ！ 私も真似事をしてみるかの」

「ああ……なるほど。このケープは『赤装束』ですね？」

頷きを返し、私はくるりとその場で回ってみせた。頭に被った狼の白い毛皮が共に回る。

青年は肩にかかった己のケープを軽く直して、握り拳を作る。

「聖誕祭の夜だけは、大人もサンタクロスですから」

「ふむ？ 人間も妖精に……？」

「言葉の綾ですよ。さ、準備を始めましょう！ 当日慌てるのは嫌ですからね」

青年は私の手を引いた。若々しく力強い腕に掴まれ、私の体は否応なしに引き連れられる。片足が浮いてしまいそうになりながらも、必死に足を動かして歩いていく。

「君。私の足が、地に足が」

「ああ、すみません、つい」

いてて、肉が剥がれるかと思った。手首をさすりながら、私は笑みを浮かべた。

赤装束の白ひげ妖精よ。今に見ている！

くすくすとこぼすわたしの隣で、青年のあれかこれかと模索する声の中に、石炭の候補はない。

君は赤装束の白ひげ妖精を知っているか？

赤装束の白ひげ妖精とは、その名の通り、赤色の衣装に身を包み、白い髭を蓄えた老人の妖精のことだ。彼は毎年聖誕祭と呼ばれる日の夜中に街に現れ、皆に幸福というプレゼントを贈るとい……

そうして、色とりどりに着飾ったモミの木の下で、子供達は溢れんばかりの笑みをこぼす。肌を突き刺す寒さの中で、赤装束に身を包んだ私たちは、こっそりとほくそ笑んだ。昨晚のクッキーの味を思い返しながら。

メリークリスマス、子供達よ。

どこかで、鈴の鳴る音がした。

【創作文】人魚姫―王子様視点

小岩 美里

遠い遠い国に若い王子様いました。ある日王子は自分の誕生日を船の上で祝うことにしました。王子は客と握手をしたり、ほほえんだり、話したりしていました。賑やかな歌や音楽、花火も上がり、気づいたら夜になっていました。夜が更けていくと、風が強くなり、向こうの方に大きな雲と雷がみえました。だんだん近くなってきた、船は波にもまれて激しく揺れました。高い波が船を襲い、ついにマストが真っ二つに折れました。船は転覆し、王子様とお客さんは全員海になげだされました。王子様は泳げないまま気絶して沈んでいきました。沈んだのは真夜中だったけれど、朝に起きたら浜辺で寝転がっていました。起きて少ししたら、一人の娘が走ってきて抱き起こされました。王子様は「ありがとう。わたしは生き返った。」と言い、丘の上の城に戻りました。

城に戻り、着替えたり、風呂に入ったら、王子様はある疑問が浮かび上がりました。「あれほど遠いところで沈んだはずなのに、どうやって岸まで戻ってきたのだろう。」と不思議におもいました。よくよく考えると自然に戻ることは不可能なはずでした。絶対何者かに助けられたのだろう

と王子様は信じていました。

数日後、王子様が城で集まりを開いていたら、いきなり美人が現れました。王子様は気づいてどこから来たか、尋ねました。しかし、その美人は答えることなくただ悲しそうに王子様をみていました。王子様はその美人の手を取って城の奥につれていきました。

二週間後に王子様は、この喋ることない美人と毎日を過ごしていました。でも結婚の相手は海岸で助けてくれた人がいいと思っていました。親に言われ、隣の国のお姫様と会ってみると、とても美人で惹かれました。するとそのお姫様は「あの時の王子様！」と言いました。この姫様は王子様を助けたといっているのです。王子様はすぐに結婚の準備をはじめました。その夜、そのお姫様と一緒に寝ると、真夜中に突然殺気を感じました。朝起きて、結婚式をはじめると、かわいがっていた小さな喋れない拾い子が居ないことに気づきました。結婚式の後に会いに来るかと思っていたが、その美人に会うことはもう一生ありませんでした。

責任を感じた運動会

佐藤 彰信

僕にとつて、今年の運動会は忙しく、印象深いものだった。

今回の運動会で特に僕の印象に残ったことは係の仕事で感じた責任感だ。二週間前の放課後に、記録係として具体的に何をすればよいのかについて説明を受けたが、いざ本番になるととても緊張した。しかしそれと同時に全生徒が得点版を見ることになるので正確に表示しないと、多くの人に迷惑をかけてしまうと考え、責任を激しく感じた。またそのためか、競技が終わるたびに一刻も早く得点版を更新しなければと焦ってしまい、係の先生方に「そんなに焦らなくてもよい」といわれてしまった。

また、第二部からは自分も競技に出る必要が出てきたので、自分たちの競技の得点はどのように記録するべきか悩んでいたところ、係の先生

が代わりに仕事を引き受けてくださった。その一方で、その分先生に迷惑をおかけしてしまったと思い、申し訳なくなった。結果的にうまくいったが、この責任感をこれからも生かして自分のなすべきことに責任を持って取り組んでいきたいと感じた。

互いの文化を理解し合う

塚本 賢澄

アメリカ育ちの日本人の私は、言語の壁や文化の違いなどでこれまで色々苦しんできた。私が住んでいるケイティ市は（アメリカの他の市に比べて）人種差別がそこまで激しくないと評価されている。テキサスはインド系、ラテン系、アジア系、そしてアフリカ系の文化から来る人が集まる「cultural melting pot」と呼ばれており、いろいろな文化と交流し、様々な視点を学ぶことができる点はケイティに住む魅力の一つである。現にベネズエラ人の友達や中国人の友だちもできて、いろいろな視点を知ることができた。他の文化の食べ物も美味しい！

群馬県についての新聞記事を読み、日本に住む外国人が感じる苦しみを知ることができた。参政党の「日本人ファースト」という考え方のせいで、外国人を「犯罪」や「悪いこと」を企んでいる人たちだという固定観念を持つ日本人が増えていっているようだ。記事に書いてあったブラジル出身の女性やネパール出身の男性は、日本で頑張つて働き、税金も払っているのに、SNSなどで偏見の目を受けている。私はこれを読んで、アメリカでマイノリティとして生活する中で時々感じる差別や偏見を思い出した。同情とも言える。

外国で暮らす難しさは、やはり言葉や文化、習慣の違いからくる誤解だと思ふ。シックスフラッグスで列に並んでいるときに、少し不公平な対応を受けたことがある。しかし、マイノリティの人とされて、そのまま苦しい経験で終わってしまった。日本に住む外国人も同じように、日本語の壁や地域のルールで苦労しているのだろう。

その解決方法の一つは、互いの文化を理解し合う機会を増やすことだと思う。記事では、大泉町が国際交流協会を作り、日本語講座や多文化イベントを行っていると書いていた。私もケイティ市で開かれるインターナショナルナイト（小学校主催する）やフェスティバルに参加することで、違う文化の人たちとつながるきっかけを作っている。こうした交流は偏見をなくすために大事だと思う。

まあ協力すればどうにかなるんじゃないか？

これからの共存のために

野田 彩人

私はアメリカに住んでいるが、日本語や英語、さらには、文化の違いで苦労することはあまりない。アメリカには各国から来た人種がすでに住んでおり、その中に私も入っている。そして日本では、日本人の見た目のため、他の外国観光者や移住者とは違い、差別されることは非常に少ない。だがSNSで外国人に対する偏見を見て、自分もそう見られているという不安と不満は多少ある。

群馬県の大泉町の記事を読み、そこでも外国人と日本人の間に文化的な違いや不満があることを知った。町では、外国人が一括りにされることに対して不満を抱いている人が多いようで、これには私も賛成できる部分が多々あった。さらには、今大泉町、各県の若者たちの中の多くが参政党に票を入れている現状がある。これには反対する。自分はアメリカ国籍のため、日本に入れなくなる可能性があるからだ。他にも、日本を、ただゆつくり観光する人たちにとっても不公平だと思う。

そのため、これからの共存のためにもまずは互いを認め合い、わかり合うことが最も重要であると思う。大泉町では、外国人と日本人が交流できるイベントを開催したり、多言語のパンフレットを制作したりして、互いの認識への誤解を減らそうとしている。このように些細なことでも互いにわかり合う努力をすることでより共存への道は近くなり、この問

題への解決も早くなると思う。

毎日の手作り料理

堀切 絵理奈

私の母は毎日、お弁当にお夕飯にと美味しい料理を振舞ってくれます。私は普段、友達に手作りのお菓子を振る舞うことがよくありますが、親にはあまり出しません。むしろ、材料の用意をお願いしたり、片付けを手伝ってもらったりして、母の仕事を増やすばかりです。ですが、お菓子作りに勤しむ私でも、まれに晩御飯を振る舞う時があります。それは、自分が食べたいものを作る時です。以前、私はハワイ料理であるポキ丼を食べたいと思い、レシピを調べて一人で家族のために作ったことがありました。元々何かを工作することは好きのため、私にとって料理自体は苦ではありません。それでも料理には労力がかかります。時間もかかるし、面倒な作業もたくさんあり、作っている最中は思わずため息がこぼれてしまうこともあります。私は母が毎日こんなに働いてくれていることに、感謝の前にまず尊敬の気持ちを抱きました。家族のために、毎日他の家事と両立しながら料理を作ってくれることに、単純に心から「すごい」と感じたのです。

母は私が手料理を振る舞うととても褒めてくれます。それには教育的な意味も含まれているかも知れませんが、同時に「作ってくれて嬉しい」という気持ちも確かに入っていることが伝わりました。「美味しい、ありがとう」と言ってくれた時は照れくさくなってしまい、どんな反応をすればいいか戸惑いました。が、手間をかけて作ったものにちゃんと向き合ってくれた言葉を貰うと、努力が報われた達成感を得、また料理をする意欲がわきます。「またぜひ作ってほしい」と言われれば、自分の料理に対しての自信がりました。そこで、感謝の大切さを改めて実感しました。その大切さはいつも料理を振る舞う側である母が一番理解していることにも気づきました。だからこそ、私もこれからは少しずつでも母

に感謝の気持ちを形にして返していきたいと思いました。

今まで当たり前のように受け取っていた母の優しさは、実は思いやりと努力の上で成り立っていると知った今、私からも母の笑顔を増やせるように、感謝の気持ちを返していきたいです。

男女共学と男女別学のどちらがより生徒の成長につながるか

水田 芽生

私がテーマとして選んだのは「男女共学と男女別学のどちらがより生徒の成長につながるか」です。私は、男女別学のほうが生徒の成長につながると主張します。その理由について、「成績」と「リーダーシップ」の二面から話します。

まず、成績についていくつかの参考資料をもとに説明します。ネットで見た記事によると世界的に男女別学の方が成績が向上しやすいと認められているようです。共学と別学のどちらで学力が伸びるかを調べるには、同じくらいの学力を持っていた人が共学と別学に進学した後、どのような差が生じたかを比較する必要がありますが、そのような条件がそろった状況はなかなかありません。その点で昨今注目を集めているのが、韓国・ソウル市内の十一の学区にある六十八男子高校、六十女子高校、六十八共学高校に在籍する約九万人を対象に、米ペンシルベニア大のパーク教授らが行った二〇一三年の研究です。結果は、男女ともに韓国版の大学入試センター試験・大学入学共通テストの点数は、別学の生徒のほうが共学の生徒よりも高いこと、別学の生徒のほうが大学進学率は高く、中でも四年制大学への進学率は高くなっていることが分かりました。

次にリーダーシップについてです。日本の公立中学、高校の生徒会長の男女比率は男子が七割から八割、女子が二割から三割程度で、明らかに女子の生徒会長が少ないことがわかります。実際に私が通っていた学校の生徒会長は男の人でした。また共学に通っていた家族や友達に聞いたところほとんどの人が生徒会長が男性であったと話していました。しか

し男女別学の場合、性別にとらわれることなくリーダーになれる環境にあります。このような状況にある人のほうが向上心が強まり、成長につながりやすいと考えます。

もちろん共学には共学の良さがあります。学校以外の場所では男女で分けられていないのだから、分けることに対して違和感があることもわかります。しかし、だからこそ、リーダーシップを身に付け、新たな知識を吸収する場所ぐらひは、より成長の可能性が見込める男女別学の学校で受けるべきなのです。

就きたい職業

赤野 航也

僕が将来就きたい職業は総合商社、コンサル、金融系の三つです。なぜこの三つに惹かれたかという点まず僕はお金や人を動かすのが好きだからです。

まず総合商社についてですが、そこで僕は国内外に向けての事業拡大を主に行きたいです。アメリカで駐在員の息子として過ごした経験を活かし、海外でのニーズや要求を満たしていきたいです。

次にコンサルですが、僕はいま現地で経済学のクラスを取っていてそこでいろいろなビジネスを学んでいくうちに事業戦略や経営に興味が出てきたからです。僕は問題解決能力に自信があるので、クライアントの企業が抱える課題を発見し、それを解決、さらに他の課題が発生する前に予防するということをしたいです。

金融については、経済成長を助けられるような人材になりたいです。この三つの業界に入るために必要な資格は特に明記されていませんが、TOEIC高得点や、海外経験などがあると有利なのでそのために今アメリカでできることをしていきたいです。

私は将来、職人になり、伝統工芸品に関わる仕事がしたいと考えている。そう思うようになったきっかけは、祖父が昔、西陣織のお店を経営していたことだ。小さい頃からその話を聞くうちに、西陣織という伝統工芸に自然と興味を持つようになった。

私は昔から、細かい作業をすることが好きだ。一度始めると時間を忘れて集中してしまい、同じ作業を何度も繰り返すことも苦にならない。このような自分の性格は、丁寧さや根気が求められる職人の仕事に向いているのではないかと思っている。

現在、西陣織だけでなく、多くの伝統工芸が後継者不足という問題を抱えている。長い年月をかけて受け継がれてきた日本の伝統工芸が、担い手不足によって失われてしまうのは、とても残念なことだ。だからこそ、私たち若い世代がその価値を理解し、次の世代へとつないでいく必要があると感じている。

伝統工芸の世界では、特別な資格よりも、どれだけ時間をかけて修業を積んできたかが大切だと言われている。卒業後すぐに職人の道へ進み、修業に専念するという選択があれば、大学に進学し、伝統工芸の魅力を多くの人に伝える仕事に就くという道もある。どの道を選ぶにしても、伝統工芸を守りたいという思いが何より重要だと思う。

もし私が職人として働くことになったら、まずは基礎を大切にし、練習を重ねながら技術を身につけていきたい。そして、ものづくりだけでなく、人にもやさしく接することができると職人になることを目標にしたい。

今年の秋、宇宙兄弟という漫画にハマってから、より一層宇宙飛行士という職業に興味を持った私。現地校の授業で、宇宙関係のテーマを選ぶほど宇宙に好奇心を持ちました。そのため、コマンダーになったことのある大西卓哉さんのセミナーを直接聞けると知った時は、内心大喜びでした。

去年の宇宙セミナーで講演された米田さん、諏訪さんの時も思ったのですが、宇宙飛行士になれる方々は、謙虚だけれど堂々としていて、肝が据わっているなど感じました。子供から大人まで、みんなの興味を惹くような分かりやすいトークと説明をしてくださり、最後まで飽きる事なく興味津々で耳を傾けることが出来ました。

今回聞いた話の中で一番心の中で盛り上がったのは、ISSの様子をカメラで捉えるサイモンです。宇宙兄弟で読んだ、宇宙飛行士を撮ったり話し相手になってくれたりするAIロボットのブギーとそっくりや！と一人で嬉しくなって盛り上がりました。

また、ISS内にある筋トレの機械や、地上から遠隔操作しながら細胞の研究を行っているなど、漫画の世界が実際に現実でも行われているんだと、これからの未来の可能性をますます感じる事ができました。

このように、毎年宇宙セミナーというヒューズトンならではの機会をいただけてありがたいなと思います。講演会を通して、宇宙をより身近に感じ、自分ももっと頑張ろう、という気持ちにさせてもらえる貴重な経験が今年もできました。

自分の道選び

今関 優子

自分の道選びは、自分で決めることであり、他人に決めてもらうものではない。人の評価を気にして選んだ道を選んだ人は、後々失敗した時に、道選びが難しくなる。だが、早くに失敗する人、小器用にできないために失敗する人は、自分の道を見つけやすいといえる。では、あなたが「道選び」にあたって、どのようなことを大切にすべきだと考えるか。

私はこの課題文を読んで、「道選び」には失敗をどのように次に活かすかが大切だと考える。なぜなら、失敗に対していつまでも引きずっていると、前には進めないし、道選びをやり直す時間が減ってしまうからだ。

確かに失敗することは、恥ずかしいかもしれないが、人は誰しも、必ず人生の選択に失敗することがあるし、後悔することがある。だが、失敗したときに、必要以上に落ち込むのは自分自身にも周りにも良い影響を与えない。また、失敗を認識しなければ、自分に本当に向いている道を探すサインを無視しているということである。

よって、私は、人生における道選びには、自分で選ぶことに意味があり、失敗した時の「向いてる道」と「向いていない道」を見極めることが大事であると考ええる。

異文化間のコミュニケーションに必要なこと

キム 瑠納

河合隼雄「日本人の心のゆくえ」を読んだ。作者の「異文化間に生じる誤解について、説明と了解が可能であり、共通の基盤を持っているがそれが行為として顕れる時に異なる形をとる」という主張には賛成する。

異文化間には誤解が生じやすく、しかしじっくり話し合えばお互いを理解し合える可能性がある。ただし、この異文化間の理解については実

際には面倒だという認識が世間にはある。「じっくり話合う」という状況にはあまりたどり着かない。

文中には、「日本人がネパール人に相当な贈物をしたが、あまり礼も言われず、お返しもないので不審な気がしたことが述べられていた。ところで、この「お返し」が十年後くらい後になされたのだ。そこで、贈物に対してすぐお返しをするのが、この文化では非礼であることをこの人は知った。」とあった。自分に知見のない文化を理解しようとするのには時間もかかり、とにかく面倒である。この思考を改善しなければ、どうにも良い人間関係にはたどり着かないし、何事も変わらないだろう。異文化理解の議論においてはもっと広い視野が必要だと思う。

日本人は多に異文化に敏感で、自国の文化を誇りに思うあまり、他文化を受け入れない硬さがある。日本は「空気を読む」文化が根付いており、世間と異なる行動をとると見下されることが多い。アメリカでは文化や人種、国籍が多様で、異文化が身近に感じられる。それゆえ、国籍や文化に関わらず新たな絆が生まれ、共通点や喜びが見つかるのだ。

日本は国としてプライドが高く、そのプライドゆえに「日本人」に当てはまらない人々(外国人やハーフ、価値観が異なる人々)に対して厳しく接することがある。しかし、自分の文化を大切にすることは決して罪ではない。特に日本のような文化的に貴重な場所では、その誇りは重要だ。とはいえ、その誇りを超えて他者と向き合い、理解し合うことが、異文化理解のために最も大切なことだと思う。

自分の強い意思と居心地

蒔 ここな

「道選び」というのは、自分の将来を左右する、やりたいことや夢の選択の一步である。自分の目標を決めるに当たって大事なことは、自分が今後、本当に何がやりたいかを見越すのが大事で、道というのはまだまだいろいろな可能性と選択を広げられる過程とし見るべきだ。

まず自分の目標は、自分が今後本当に何がしたいのか考えることだ。自分の「道選び」である大事な選択だからこそ、自分で探して決めるべきだ。筆者も言っているように、「両親が希望したから、将来安泰だから、世間体が良いから」ということを基準にして道を選ぶのは、やめておくべきだ。私は自分で決めた道だからこそ、そこに向かって努力を重ねていけるようになると思うのだ。

そして、道はあくまで、まだ自分の決めてく目標の中で可能性と選択を広げられるものだと思っている。がむしやりに努力を重ねてうまくいかなかったら、それは筆者が述べているように「あなたにはその道が向いていないサイン」かもしれない。しかし、これは自分が劣っているわけではなく、自分に合っていない道だけなのだ。上には上がいるように、得意で好きなことでも何でもできる訳では無い。だからこそ私は視野を広くして、いろいろな選択肢を作る事によって、どこかにヒットできると思う。

以上のことから、「道選び」にあたって大事だと思うことは、周りの意見ではなく、自分が進みやすい道を目指すことだ。それは、道一つに絞らず視野を広げて、自分が一番居心地の良い道を探すことだ。

道選び

穆 雲赫

失敗を繰り返すことは「失敗のサイン」であり、自分に合った道を探している証拠だ。どれだけ努力しても報われない人は世界中に大勢いる。自分が劣っていると感じたり、他人を羨んだりすることもあるだろう。しかし、そのような苦しみの中で蓄積されるのはストレスばかりで、結果的に自己完結的な失敗を繰り返すことになる。そのたびにストレスを発散する姿は、実に滑稽極まりないだろう。

友達が成功しているから自分も成功するはずだ。親が勧めているからこの分野を極めてみよう。それらは、本当に自分の意志によるものなの

か。失敗を恐れることなく、何度でも自分に合った道を見つけようとすることは、むしろ成長の一步だと私は思う。失敗から学び、自分に合った生き方を見つけることこそ、人生を豊かにする鍵だ。

「失敗は成功のもと」という言葉は、私にとって大きな支えである。失敗の原因を反省し、改善しながら前進することで成功につながるという意味に、何度も救われた。私の後ろには無数の瓦礫と化した壁がある。その背景には、観客には絶対に見えない幾千もの失敗の痕跡が残っている。失敗は、決して悪いことではない。大事なものは、失敗の理由とどう向き合い、その先どうするかを決める人生の踊り場だ。一度立ち止まって、これからの道を考える。失敗というのは、自分の今と未来を変えるきっかけであり、成長のトリガーだと、私は思う。

道選び

栗林 杏奈

私は異文化間のコミュニケーションにおいて必要なことは、「お互いに理解しようすること」だと思う。なぜなら、文化の差による風習の違いは、お互いの説明を聞けば了承できることだと思っからだ。しかし、本文にも書いてあるとおり、説明を聞く前に速断してしまうことによって、誤解が生じてしまうことがある。説明を聞けば、文化の差として受け入れられるものが、コミュニケーションの悪さによって価値判断に直結してしまい、お互いの関係の悪さやイメージ、偏見を悪化させる原因になってしまう。しかし、これはお互いの文化や風習に偏見を持つ前に説明をする、または理解しようとする姿勢を取ることによって解決できることである。

異文化間でコミュニケーションを取るときに偏見を持たないことは、難しいと思う。なぜなら、私も米国に来て文化の違いを経験した。例えば米国では、道を歩いているとたくさん国旗を見かける。しかし、日本では道を歩いていると、国旗を見かけることは滅多にない。そして、日本には

州旗などというものは存在しない。私は米国に来て、お互いの文化の違いを否定するのではなく、なぜそのような文化があるのか、説明を聞く、もしくは自分で考えるようにしている。まず、偏見を持つ前に相手の文化に興味を持つことで、知り得よう、考えようとする姿勢を大事にしていきたいと思う。

この世の中には、私がまだ知らない文化がたくさんある。これからもその文化の違いを否定したりするのではなく、まず興味を持ち理解しようとする努力をしていきたいと思う。

高等部三年A組

宇宙セミナー 大西宇宙飛行士へのお礼の言葉

大塚 彩音

本日は大西宇宙飛行士による宇宙セミナーに参加させていただき、誠にありがとうございました。大変貴重な機会をいただき、心より感謝申し上げます。特にISSでのセルグラビセンシングの細胞の観察の実験、個体燃焼実験装置での無重力での燃焼現象の研究に関するお話は、大変興味深く、目から鱗でした。大西宇宙飛行士のISSの解説でのサッカー場やマラソンなどの例えや、写真と動画を使った無重力の生活の説明は、難解な内容も分かりやすくなっていて、深く理解することができました。

宇宙の広大さや人類の探求心に改めて感動しました。本日学んだ知識を、今後の大学進学先の学校活動に活かしていきたいと思えます。この学びを糧に、より一層いろいろな分野での探求心を深めていきたいと思えます。

今後は自身の工学部への大学進学の実現に向けて、自分なりのできる努力をしていきます。十三年間この補習校に通わせていただいた中、このように直接御礼を申し上げる機会を得られたことを大変光栄に思います。

最後になりますが、大西宇宙飛行士のますますのご健勝とご活躍を心よりお祈り申し上げます。

どこにいても外国人

大澤 翠

補習校に通う多くの児童生徒は数カ国に住み、「日本人である」という意識が薄れていると思う。アメリカ国籍があると特に、自分はアメリカ人と感じる人もいだろう。

日米ハーフとして日本に生まれ、小学校のときにアメリカに移り住んだ私は、自分を日本人であるともアメリカ人であるとも感じない。見かけがほぼ完全に西洋人なので日本では別扱いされたが、アメリカに移り住んだときには英語が下手だったため、外国人生徒の英語能力を強化させる English Second Language Program に投入された。要するに、どの国でも自分は外国人であると感じてしまう。だれにとつても、自分の居場所がないと感じることはかなり苦しいことだと思おう。

そのため、「外国人と共生『簡単ではない』賛成投票が上回った『優等生』の本音」を読んだとき、外国人とみられながらできる限り日本人としての義務を果たし、市の一部として見られたかった移民や二世・三世の視点に感銘を受けさせられた。彼らは、祖国にもう「自分の居場所」がないことが多い。日本語を学び、日本で働き、日本で子供を生み、日本に家を買いたい、日本社会に貢献しながら、日本人から「排除するべき外国人」と思われることはどれほど苦しく、悲しいことだろうか。

日本人が外国人との利害関係をまず先に考えることは否定できない。なぜなら、ほとんど誰でも自分に有利かどうかで物事を判断するからだ。日本人に限ったことではない。しかし、外国人がもたらす利益を軽視し、彼らがもたらす損失を過大視することを弁解できるだろうか。

少子化によって労働者や消費者を失っている日本にとつて、外国人は多大な経済的メリットを与える。前述の記事によると、日本人の経営する事業は外国人の客によって支えられている。また、日本の企業は外国人の労働者を低い賃金で雇うことで人手不足を補っている。そのようなメリットに比べると、「騒音がひどい」ことや「バーベキューの煙が迷惑」という文句の重要性は霞んで見えるのではないか。

もちろん、できることなら移民を日本の暮らしになじませることが都合が良いということは理解できる。また、地域の取り組みで交流を促すことに効果はあるだろうが、移民の文化を拭い去ることはできないだろう。果たして、拭い去ることができてそれが日本人のためになるとは一概にはいえない。

日本人は、外国人の文化の違いや習慣を迷惑だと感じて、外国人を排除できるような地位にない。今や、日本の経済・人口は外国人をなしにする転倒してしまふ。

移民を排除することができないならば、移民ができるだけ日本人らしく生活していけるように尽力することが大事だ。外国人に日本語を学ばせ、日本の法律や地域の一員としての義務を理解させるために地域のプログラムを提供し、且つ個人が（地域に迷惑をかけない範囲での）移民の伝統を尊重しなくてはならない。

簡単な解決策は存在しない。しかし、日本人と移民の利害関係を冷静に考えて、その上で、移民の一人ひとりの人間としての価値を、利害関係とは別にして敬わなければならないことを心がければ、共存に近づくことができるだろう。

〈新聞記事…デジタル版 朝日新聞 2025年7月27日〉

変化に慣れ、受け入れていくべき

竹本 千祥

私はこの記事を読んで、色々理解した。外国人の気持ちと日本人の気持ち。なぜなら私は両方の場面を少なくとも経験しているから。最近若者たちの中で参政党が流行している。Tik Tokやニュースでその場面をよく耳にする。理由は日本人ファースト。僕の地域では外国人は学校にはいないに等しいくらいだが、ネットを見る限り日本人が不満に思う瞬間が少しあると感じる。

だがこの記事にある通り、外国の方にも思うことはあるし、それをどうにかしようとする日本人、そして外国人までもいる。糸井さんは外国

人との共生が始まって三十五年、まだ半ばと言っている。こんなに頑張ってもまだ続いているし、増加もしている。

僕が思うに、日本人は逆に外国の方に慣れていなさすぎるように感じる。現に英語を知っていても喋れない、ちよつとのことにも最近うるさい。日本人はみんな自分の個性、感性を殺しているように感じる。それも外のことを知らないからのように思う。

アメリカに住んでみると、色々な人がいるので、変に思うこともあったが、ほとんど受け入れるようになり、少し変に思っていた事についても何も思わないようになってきた。更に、僕はアメリカのほうがあるのままでいられるようにも感じる。

僕は、ここ最近の変化に慣れ、受け入れていくべきだと思う。この問題は簡単には決められないが、ここ最近互いに共生できるように変えようとしている日本人、外国人がいることも、参政党と同じくらい知られるべきなのは事実だ。

〈新聞記事…デジタル版 朝日新聞 2025年7月27日〉

父の背中

岡田 尚樹

父に一番感謝していることは、海外に連れて来てくれたことだ。初めての海外転勤は一歳の時のチリ、次が小学二年生の時のシンガポール、そして最後が中学三年生の時のアメリカだ。これらの海外在住の経験は僕に新しい視点と可能性を開いてくれたと思う。海外での経験で一番記憶に残っているのはシンガポールでのことだ。チリでの生活はすっかり忘れてしまっていたので、シンガポールの生活が、実質僕の初めての海外在住だった。慣れない国で新しい環境でも父はサポートしてくれた。

たまに口うるさいこともあるが、それらもすべてひっくるめて父に感謝している。